

概念の認知科学と実験哲学

飯島和樹 (Kazuki IJIMA)

東京大学大学院総合文化研究科

太田紘史 (Koji OTA)

東京大学大学院総合文化研究科

実験哲学は、哲学的命題やそれに関連する思考実験に対する非哲学者の直観的判断を調べてきた。その結果、哲学者が予想しなかった仕方で直観的判断が方向づけられうるものが、明らかになりつつある。だが、それをどのように解釈ないし理論化するかは、非常に微妙な問題として、未解決のままである。すなわち、そういった直観的判断は、関連する概念（あるいは概念的認知）の本性を明らかにしているのか、あるいは、その概念を使用する仕方にエラーやバイアスが生じる仕方を示しているのに過ぎないのだろうか。

例えば、ある行為者による行為が有害な（とりわけ道徳的に悪い）副作用を伴うとき、被験者はその行為者に対して、（その副作用に対する）意図をより高い頻度で帰属する傾向にある（いわゆる副作用効果）。ここでは、意図帰属が道徳的認知により因果的な影響を被ると考えられる (Knobe 2003)。だが、このような影響が実際に成り立っているとしても、この影響過程が意図性概念の作動として本来のあり方なのか、あるいは意図性概念の作動として不適切なあり方なのか、明らかではない (Machery 2008)。また例えば、自由意志と決定論にまつわる両立論的な判断が形成される時、これは自由意志概念の本来の働き方を反映するものなのか、あるいは何らかの要因によって自由意志概念が不適切な仕方で作動した結果であるのにすぎないのかが、やはり係争点となる (Nahmias et al. 2005; Nichols and Knobe 2007)。

これらの点は、言語学における能力 (competence) と運用 (performance) の区別という考え方に基づいて、次のように問われてきた——副作用効果や両立論的判断は、関連する概念の能力を反映しているのか、あるいは概念の運用におけるエラーにすぎないのか。

我々は今回、この問題に取り組むうえで関わりうる理論的あるいは方法論的な想定について考察する。一方で我々は、認知における能力と運用の一般的な特徴について検討したうえで、この問題に対して運用エラーの観点から答えるための方策について考える。他方で我々は、この問題に対して能力の直接的な反映という観点から答えるために必要となる理論的研究と経験的研究について考える。とりわけ、概念の構造と機能に関する特定の理論的想定を採用することがどのようにこの問題に関わるか、また、素朴心理学的な概念獲得や認知発達に関する研究がどのようにこの問題に関わるかについて、検討する。